

## 深みが織りなす「まち空間」

登録番号 No.5 小野 公嗣

土屋大輔, 栗田豊己, 関孝太郎, 北山剛, 五十嵐淳博, 犬飼武, 戸田鉄也

街路の空間体験がゆたかなまちは、歩いて楽しいまちとなるであろう。それぞれ性格・趣が異なる街路が階層だつてつながれば、全体として奥行き感が生まれ、「深み」のある街並みが形成される。従って、空間体験がゆたかなまちを創出するには、街路の多様性が必要不可欠である。

対象地区には、歴史的な建築物が点在する旧奥州街道や中津川沿いのみち、アーケード商店街、うらぶれた雰囲気のある裏みちなどがあり、街路の多様性がある程度感じられる構成ではあるが、街路間のコントラストが曖昧な上、街路網の核となる表通りが存在しない。そこで、晴れやかな表通りを創出すると共に、情報量のコントロールによって各街路の個性を引き立たせるしかけを施し、全体としてまちの「深み」の創出をねらった。

具体的には、現状では特徴の無い街路空間となっている R106 周辺を、対象地区の街路網の核となる表通りと位置付け、晴れやかな表空間となるような演出を施した。一方、ホットラインサカナチョウを親しみの持てる雑多な雰囲気の庶民の商店街と位置付けて、店外への情報の溢れ出しをさらに強めた。これにより、「表空間」の R106、「裏空間」のサカナチョウというコントラストを出し、まちの「深み」を高めることをねらった。

また、対象地区、さらには盛岡の玄関ともいえるバスセンターをまちのシンボルとするため、まちのゲートを意識したアーチを R106 をまたぐように設けた(写真-1)。このようなシンボルの創出は人を集め、まちの活性化にも役立つものと考えられる。

さらに、歴史的な建築物が散在する旧奥州街道では、形態の規制・情報の抑制(店外から店内の商品等が窺えるような工夫をする)等を行い、落ち着いた雰囲気の歴史性のある街路を形成し、既存の歴史的建造物を生かすことをねらいとした。また、街道筋の雰囲気を阻害する東北電力を撤去して町屋型住居・公共施設等を配置し、街路景観の向上と回遊性、にぎわいの創出を目指した(写真-2)。そして、現状においても魅力的な空間である中津川沿い地区では、河川空間への親しみを演出する整備提案を行った。



写真-1 新バスセンターとアーチ



写真-2 東北電力跡地鳥瞰図